

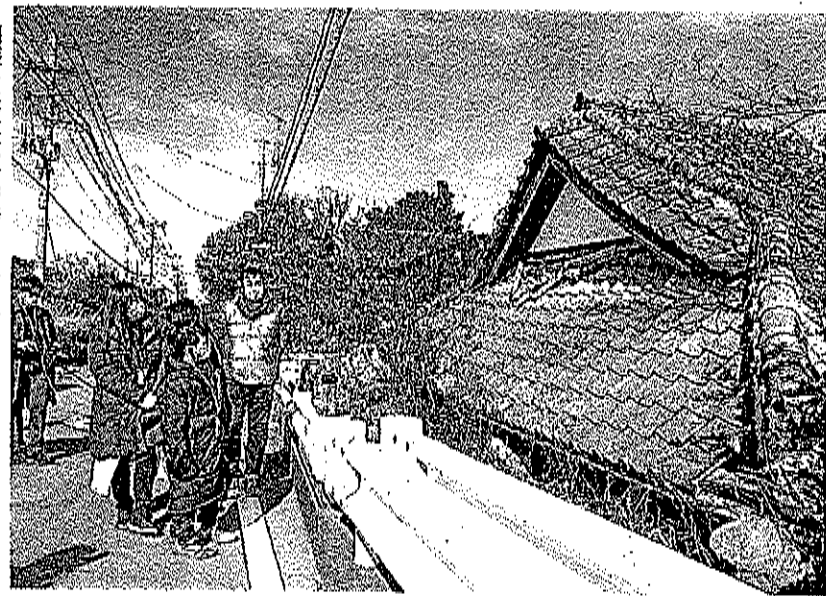
原発被害 伝えておきたい

双葉町 事故後初めて自宅に一泊の一家

無人の街崩れた家に伸びる木……

東京電力福島第一原発が立地する福島県双葉町で、今夏の帰還に向けた「準備宿泊」が始まっている。同町は唯一、全住民の避難が続いており、自宅に寝泊まりできるのは今回が初めて。29、30日にかけて故郷に戻った家族に同行した。

福島第一原発から北西6キロに位置する同町鴻草地区。「帰還困難区域」に指定され、バリケードで閉じられた家々が並ぶ。29日昼、大沼勇治さん(45)は妻と息子2人と歩きながら、こう語りかけた。「原発事故の被害は見えにくい面もある。だけれど伝えておきたいんだ」



倒壊した家屋の前で妻と息子に話しかける大沼勇治さん(29日、福島県双葉町、小玉直隆撮影)

2人と歩きながら、こう語りかけた。「原発事故の被害は見えにくい面もある。だけれど伝えておきたいんだ」大沼さんが幼少時に行っていた床屋、同級生の家、自動

双葉町には震災当時、7140人が住んでいた。原発事故による全町避難が今も続き、町民は42都道府県で避難生活を送っている。町は、帰還困難区域のうち「特定復興再生拠点(復興拠点)」について、6月の避難指示解除をめざしている。これに先立ち、帰還する町民が生活の準備をするため自宅に泊まれる「準備宿泊」が1月20日から始



大沼勇治さんが考案した原子力推進の標語が掲げられた看板。福島県双葉町に設置されていたが、2016年に撤去された

車教習所に通った道。人の木が伸びていた。双葉町は9割超が帰還困難区域で、住民は一人もいない。地元の人たちとのつながりは薄くなり、近所に住んでいた人や同級生の死去は町の広報紙で知った。大沼さんは「さみしい。原発事故がなければお線香をおげられたのに」と残念がる。解体された家も多く、大沼さんの自宅は更地に囲まれてぼつんと残る。小中学校の再開のめども立たず、大沼さんも自宅を解体する

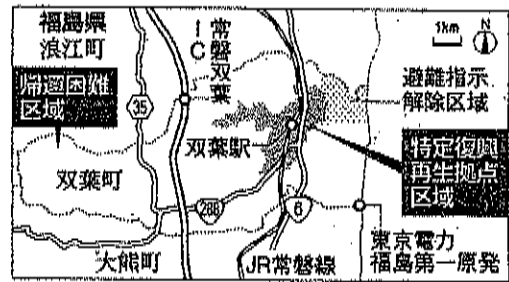
帰還希望する住民 1割のみ

双葉町には震災当時、7140人が住んでいた。原発事故による全町避難が今も続き、町民は42都道府県で避難生活を送っている。町は、帰還困難区域のうち「特定復興再生拠点(復興拠点)」について、6月の避難指示解除をめざしている。これに先立ち、帰還する町民が生活の準備をするため自宅に泊まれる「準備宿泊」が1月20日から始

準備宿泊 少ない申請
戻った。一方で避難先での生活再建が進み、27日までの準備宿泊の申請は13世帯19人、未成年は大沼さんの息子2人だけだ。町は避難指示解除から5年後に、移住者も含めて居住人口2千人を目標に掲げる。だが、復興庁や町が昨

町を中心街入り口に掲げられていた看板の標語「原子力明るい未来のエネルギー」は、大沼さんが小学生の時に考案したものだ。原

つもりだった。そんな考えを変えたのが、次男・勇勝君(8)の言葉だ。「双葉が好き。また



「新しい思い出つくりたい」

双葉に来たい」。昨年3月、一家で双葉町を訪れた際にその口にしたという。大沼さんは背中を押され、昨年4月から自宅の整理や除染を進めるなど生活環境を整えてきた。今後は夏休みなどに家族で戻りながら、変わりゆく町の姿を見届けるとも。

発事故後は「未来を託した原子力が一瞬で多くの人の運命を狂わせた」と思い悩んだが、いまはこう考えている。「同じことを決して繰り返さないよう、自分の「間違い」も含めて子どもたちに伝えなきゃいけない」

(福地隆太郎)